

近藤光男教授  
賴 惟勤教授

退官記念号

昭和五十六年四月に発足した本学会は、今年四月をもって満六年を経過し、会報も本号で第六号を数える。この間、学会の基礎造りのための幾多の困難、並びに問題を会員諸氏の協力のもとに何とか解決しつつ今日にまで到ったのであるが、いまだその基礎は必ずしも十全とはいえず、なおまだ草創の段階にある。かかるとき、本学会はここに一つの転機を迎えることになった。

本学会がお茶の水女子大学教育学部中国文学科を母体とする学会であることは、会則にも明記されているごとく、いままさら多言を要しない。同学科の卒業・修了生および専任教官の有志によって構成される本学会が、有志とはいえ過半数に及ぶ卒業・修了生の参加を得ている現状を見れば、学科の研究・教育と不離不可分の密接な関係にあることは、言うまでもない。いわば学科は本学会を支える土台であるが、同学科において、本年三月末日をもって近藤光男教授、頼惟勤教授の両教授が定年退官されることとなった。

両教授それぞれの略歴並びに主要な業績に関しては、別項を参照されたい。ここでは本学会および学科とのかかわりについてのみ概略を述べておこう。

近藤光男教授は昭和四十七年四月にお茶の水女子大学に御着任以来、学問研究の厳しさと楽しさを率先垂範、本学会の設立並びに運営に鋭意尽力された。特に発足時から満五年、本学会の最も重要な時期に、会長として学会活動の全般にわたり懇切な指導を仰いだ。

頼惟勤教授は昭和二十七年四月に御着任、以来三十五年もの長い間、中国文学科のすべての学生・院生の教育に当たられ、学会においても当然のことながら、積極的な参加と温い研究指導を賜った。学問研究の先達として示された厳しさは温容のうちに儼然と貫かれていた。

両教授とも奇しくも学の根柢を清朝の學術におかれ、精確細緻な学風はわれわれ学会員並びに受講生すべての敬仰して止まぬところである。まことに高山景行の思いを禁じえない。

もとより、両教授の定年退官は学科におけることがらで、本学会における両教授の存在は今後も決して変わることはない。ただ、お茶の水女子大学の研究室等で親しく警戒に接する機会が従前に比べて少なくなるであろうという過ぎないが、両教授の退官に際していささかなりともその学恩に報いるべく、本号を両教授の退官記念号として編集した。意有れど力足らずの感無きにしもあらずであるが、学会のこれからの充実発展の新たな一歩を刻む好機として、近藤・頼両教授のますますの御健勝を祈念しつつ、本号を献げたい。

昭和六十二年四月

お茶の水女子大学中国文学会

会長 佐藤 保

委員長 平松圭子

藤山和子

高橋由利子

菅原博子

根岸政子